

## 活動報告

# 国際看護論における演習をオンライン授業と 当事者参加型授業で実施して

Webinar Class on International Nursing Study and Participatory  
Students' Education for a Participant with Physical Health Difficulties

櫻井 真智子 東田 吉子

Machiko Sakurai, Yoshiko Tsukada

キーワード：国際看護論, オンライン授業, 学習効果

Key words : International nursing study, Webinar class, Learning effects

## Abstract

At Saku University, the overall goal of International Nursing Study is "to cultivate nursing students who can think of international contributions from an international perspective," based on curriculum reform of basic nursing education by the Ministry of Health, Labour and Welfare, Japan (2007). International Nursing Study is an elective subject, worth 2 credits (60 hours) provided in the fourth year. It has been implemented at Burapha University in Thailand, but no overseas travel was possible in 2020 due to the COVID-19 pandemic. In 2021, a webinar on International Nursing Study was held mainly with Burapha University, along with Our Lady of Fatima University, Philippines, together with participatory students' education for a participant with physical health difficulties. Two students took the subject.

Webinars have some limitations, however, but their advantage is the ability to connect with several countries in a short time. Also, webinars provide learning effects such as understanding of other cultures and state of nursing there, enhancement of students' motivation for international study, and a feeling of friendliness among students in other countries. Combining the webinar with the participatory students' education program increased learning effects in understanding foreign participants and developing awareness of the role of nurses.

## 要旨

佐久大学では、厚生労働省(2007)の看護基礎教育課程における国際看護教育の位置付けに伴い「広い視野を持ち、看護を通じて国際貢献できる能力を育成する」を掲げ、4年次生の国際看護論演習(2単位、60時間、選択科目)において、タイ王国国立ブラパ大学での海外研修を行ってきた。2020年度はCOVID-19の世界的流行を受け海外研修は困難となり、今年度(2021)はブラパ大学との授業をメインに、フィリピンのアワレディオブファティマ大学とオンラインで結び、国内でできる「当事者参加型授業」を組み合わせる国際演習を実施した。履修生は2名で

---

受付日2021年9月30日 受理日2021年11月19日  
佐久大学看護学部 Saku University Faculty of Nursing

あった。オンラインでの限界はあるが、メリットは、短期間に複数の国と交流できること、また異文化、他国の看護事情の理解、学習意欲の向上、同じ看護学生として親近感を感じるなどについて学習成果を確認することができた。当事者参加型授業を組み合わせることにより外国人当事者への理解、看護師の役割の認識等が深まり国際演習が効果的に実施された。

## I. はじめに

佐久大学では、看護学部教育目標として「豊かな人間性と幅広い教養を兼ね備えた人材を育成する」また、厚生労働省(2007)の看護基礎教育課程に基づき、「広い国際的視野を持ち、看護を通じて国際貢献できる能力を育成する」を掲げている。4年次生の国際看護論演習(2単位、60時間、選択科目)において、タイ王国(以下タイ)での演習を2019年度まで9年間行っていた。2020年度はCOVID-19の世界的流行を受け、海外演習が困難となり開講することはできなかった。今年度(2021)は、2014年度より演習を行っている(東田, 中田, 竹尾, 2015)タイの東部、チョンブリ県バンセン市に位置する国立プラバ大学看護学部(26学科を持つ総合大学、以下プラバ大学)との授業(保健医療、看護教育、文化、伝統等)をメインに、フィリピンのアワレディオブファティマ大学の看護学生との交流をオンライン授業で実施した。また、国内で対面での国際演習「当事者参加型授業」、及び学生と同世代の外国人高校生との交流を組み合わせることにより、履修した学生は異なる方法による利点を認識していた。

蛭田, 久保, 山之内(2017)の、全国の大学看護学科における国際看護学教育の実態調査では、海外研修を実施している大学は、回答のあった90校のうち53校(58.9%)であった。海外研修に参加した学生の学びや成長について「視野の広がり」「異なった文化への理解」「看護職としてのキャリアの広がり」など学生の成長が観察され、非常に学習効果が高い教育と言える」と述べている。学生たちは、現地

へ行き文化の違いなどを肌で感じる様々な経験が刺激となり、今までとは違う学びを得ていたと考えられる。

一方、看護系大学で国際看護論を開講しているが、「実習」のカリキュラムがないため、古場, 澤田, 大草(2017)は「実習」に相当する部分的効果があるとされている体験学習、いわゆる当事者参加授業を実施した。結果から、外国人当事者(看護師)を通して、学生は「外国人の生活や文化、社会的背景を学び」、「人間としての理解を深める学習効果」を示したと述べている。更に、病や障害を抱えた当事者が語る「当事者参加型授業」の教育効果に関する文献レビュー(柴田, 2010)では、学生は「当事者の生活を理解し、疾病理解の深まりなど知識面」の学び、「医療職としての態度や姿勢、心理的ケアの必要性などの技術面」に関する学び、「当事者への思い、障害を受け止めて生活していることへの感動など情意面での学びも多い」ことが報告されている。

例年、海外研修の履修者は10名前後であったが、今年度は学内研修であることから履修者は2名に留まった。

本稿では、COVID-19禍において国際看護論演習を、「オンラインと当事者参加型授業」で実施した内容と学生の学びについて報告をする。

## II. 実施内容

### 1. 国際看護論のねらい

授業概要は「国際的な視点から諸外国の健康問題および心身の健康に影響を与える社会・経済・教育、および文化・伝統的な背景

表1 スケジュール表  オンライン授業  対面授業

| No | M/Date  | Japan Time  | テーマ(Themes)   |
|----|---------|-------------|---|
| 1  | 5/25(火) | 10:40-12:10 | オリエンテーション(タイへの関心事、ブラパ大学学生とのトーク、日本から発信したい項目(プレゼンテーション)<br>アユタヤ日本人村(日本とタイの歴史的なつながり)<br>タイの概要、医療保険制度、看護教育制度、HIV/AIDSホスピス |
| 2  | 6/22(火) | 10:40-12:10 | ブラパ大学の学生の要望(日本について知りたいこと)確認<br>佐久大学の学生の要望(タイについて知りたい事)確認<br>佐久市のご紹介(佐久市のHP)など参照し、<br>ブラパ大学へのプレゼンテーションについて検討、準備        |
| 3  | 7/29(木) | 13:00-15:00 | ブータンの学生(ISAK留学生)文化交流、両国の紹介、キラ(ブータンの民族衣装)と浴衣   |
| 4  | 8/17(火) | 10:00-12:30 | ブラパ大学及び看護学部の紹介  |
|    |         |             | 大学全体(学部の紹介)、入学時期と卒業時期、学生の通勤方法、<br>食堂の状況、学内バス、看護学部の状況など、Q&A  |
|    |         | 13:30-16:00 | 振り返り、プレゼンテーション準備(グループ別)   |
| 5  | 8/18(水) | 10:00-12:00 | タイの看護教育システム、大学数、国家試験、就職状況等、Q&A  |
| 6  |         | 14:30-16:00 | タイ人の患者さんへインタビュー<br>(脳卒中後のリハビリテーション)   |
| 7  | 8/19(木) | 10:00-12:30 | タイの老年看護の状況(高齢化、実習施設、病院から地域へ)  |
|    |         | 13:30-16:00 | 振り返り、グループ学習(8/21 発表の準備)   |
| 8  | 8/20(金) | 10:00-12:30 | タイの母子保健の状況(お産時の入院期間から在宅のケア)   |
|    |         | 13:30-16:00 | 振り返り、グループ学習(8/21 発表の準備)   |
| 9  | 8/21(土) | 10:00-12:00 | 佐久大学の学生の発表<br>(佐久大学の紹介、実習の状況、佐久の文化等)  |
|    |         | 13:00-15:00 | タイの学生の発表(ブラパ大学紹介、実習の状況、カリキュラム、<br>タイの文化、食物等)  |
|    |         | 15:00-16:00 | 佐久大学学生、振り返り   |
| 10 | 8/23(月) | 10:00-12:30 | タイのOriental Medicine(伝統療法)  |
| 11 |         | 13:30-15:30 | タイの保健センターの活動  |
|    |         | 15:30-16:30 | 振り返り  |
| 12 | 8/24(火) | 10:00-12:30 | タイにおける移民への保健医療サービス(病院、保健センター)   |
| 13 |         | 14:00-17:00 | フィリピン、看護学生との交流(Our Lady of Fatima Univ.)  |
| 14 | 8/25(水) | 10:00-12:00 | タイと日本の類似点、相違点の振り返り、まとめ  |
|    |         | 13:00-16:00 | 自己学習  |

を検討しつつ看護活動のあり方を学ぶこと」である。学生は、4年次までに講義・実習を通して日本の看護および看護を取り巻く状況を学んできた。今までの学びを統合して諸外国の対象者への理解を深めると共に学生間の交流を図ることとした。

**2. 事前準備期間: 2021年5月~7月(1回/月の講義と自主学習)(表1)**

1) 内容

(1) 文献による理解(タイの社会状況、保険シ

ステム、看護教育システム、高齢社会の状況)

(2) 映像による理解(日本とタイの歴史的なつながり(動画)、一昨年(2019)までのブラパ大学における演習、地域訪問、病院見学等の写真)

(3) 佐久大学および大学が位置する佐久市について理解をしてもらうための映像(大学紹介ビデオの作成、佐久市のHP(佐久市のご紹介動画))

(4) 学生の発表資料は、佐久大学およびプラ

バ大学の学生が両国の看護、文化、社会について知りたい項目を7月初旬に交換し、準備を開始した。ブラパ大学の学生からの質問内容は大きく分けて「看護に関すること(カリキュラム、COVID-19下における実習への影響、国家試験等)と日本の文化・伝統」の2分野であった。

**3. オンライン授業期間: 2021年8月17日～8月25日(表1)**

表1のスケジュール表に沿って、ブラパ大学及び看護学部の紹介を動画で理解し、タイの看護教育システム、老年看護、母子保健、医療保険システム、伝統療法、移民への保健医療サービス等の講義を受けた。タイ、フィリピンとの学生同士の交流時には、看護学部の紹介、学生生活、COVID-19の講義や実習等への影響について発表を行い、それぞれの看護を取り巻く状況について理解を深めコミュニケーション能力を高めた。

タイとの時差は2時間、フィリピンとの時差は1時間であったため時差を考慮してプログラムを組み立てた。

**4. 当事者参加型授業**

**1) ブータンの学生(ISAK留学生)との文化交流**

ねらいとして、他国の社会について、多様な文化を知る。両国の学生同士のプレゼンテーションを通して、地域の特徴や課題に気づくこととした。

**2) タイ人の患者さんへのインタビュー(脳卒中発症からリハビリテーション、療養の体験)**

ねらいとして、患者が語る「日本で生活して一病気を体験して」というテーマから病気を発症してから療養中の状況を理解し、治療からリハビリテーションに至る経過の中で、患者の思いを理解し看護ケアについて学ぶ。暮らしの視点から家族からの支援の状況を理解する。また、障害を持つ患者から視た町の環境について理解する(外国人との共生を目指した優しい街づくりの視点)こととした。

**5. 分類と整理(演習記録・終了時アンケート)(表2、表3)**

履修学生には、演習記録として日々の授業内容とその日に学んだこと、感じたこと、考えたことについての自由記述と全授業終了後にQ1～Q5の質問からなる終了時アンケートを行った(表2)。また、授業終了後に総合的な振り返りとして「学んだこと」について最終レポートを提出してもらうこととした。記述文から、意味ある最小文を抽出した。オンライン授業(表1、No.4.5.7.8.10.12)とブータン、タイ、フィリピンの学生との交流(表3)に関しては、蛭田ら(2017)が海外研修に参加した学生の学びや成長のキーワードとして取り上げた「視野の広がり」「異なった文化への理解」「看護職としてのキャリアの広がり」「語学への関心」「積極性の増加」の5分類とした。当事者参加型授業、タイ人患者さんへのインタビュー(表1、No6)に関しては、「学んだこ

表2 国際看護論終了時アンケート 内容

|   |
|---|
| Q1. 授業開始前と、終了後では国際看護についての関心が深まったと思いますか。                       |
| Q2. 授業の中で最も関心を持ったことを記してください。(授業の番号とその理由) 複数回答自由記述(授業の番号は表1参照) |
| Q3. 今までの実習を通して、外国人の患者や対象者を見た、接した経験はありますか。                     |
| Q4. 授業を通して、今後自分で、どのような事(知識・経験など、出来れば具体的に)を修得したいと考えますか。        |
| Q5. 授業について、その他お気づきのことなどを記入して下さい。                              |

と」として古場ら(2017)が設定した「知識」の側面、「技術」の側面、「感情」の側面、「価値観」の側面の4側面と、「自己の課題として」の「看護」の学習者としての課題、「人間」としての課題、「社会」と関連した課題の分類を用いて内容を整理した。学生の記述内容にこれらのキーワードが含まれた場合、学生がその課題を認識したと判断した。

## 6. 倫理的配慮

演習の方法、内容、結果を公表することについて、履修者へ口頭で説明し了承を得た。成績評価の対象とならない、演習終了後アンケートを無記名で行い、記入しない場合でも個人の不利益にならないこと、成績には何ら影響しない旨を説明し、履修後の提出物と区別することにより提出の必要性に対する強制力がかからないよう配慮した。なお演習終了後アンケートの提出により同意を得たものとするを説明した。提出後の撤回は、個人の特定が困難であることからデータの削除は不可であることを説明した。演習記録、最終レポートについては、個人が特定されない事を配慮して処理する事を口頭で説明し同意を得た。

## Ⅲ. 結果

### 1. オンライン授業について

国際看護論のオリエンテーションを経て、タイについての看護事情、日本と関連する歴史、文化、生活習慣など事前学習後プラバ大学とのオンライン授業を実施した。授業の資料(英語)は事前に配布し、和訳の資料も可能な限り講義前に準備した。表3終了した講義であっても、疑問に思うことはメールで連絡でき回答を得ることができた。座学での「視野の広がり」「異なった文化への理解」に示されているように、学生は日本とタイとの多くの相違点(国家試験制度、医療システム、介

護保険がない、介護休暇がない、看護師不足が大きい、産後の入院期間、高齢者ケアについての考え方、伝統医療(ハーブ・薬草)によるケア、移民への保健医療サービス、周辺国からの留学生が多い)、及び類似点(文化に基づいた看護ケア、高齢者ケアの重要性、看護師不足、コロナ禍における学生の実習形態、オンライン授業の実施、看護師の役割)に気づき、視野を広げタイの文化に理解を示していた。

タイの講師から佐久大学の学生への質問(国家試験の回数、学生寮の有無、男子学生の割合等)にも応え、学生も講師へ質問するなどタイの保健・看護の状況について学ぶ積極的な姿勢が見られた。「看護職としてのキャリアの広がり」では、タイの移民への保健医療サービスについて講義を聞き、「移民の文化的背景を理解し生活習慣に対する行動変容をさせるのは難しい、日本にいる外国人にとって、医療の場での言葉の壁が多いと思う、日本にも外国人患者がいると知り、その人への対応も考える機会になった」等が記述されており、これから看護職として外国人の対応について考える必要があることを認識していた。座学であることで時間をかけて、落ち着いた環境で思考できていた。講義以外の時間においても学生同士でディスカッションしている様子が見られ学びを深めることに繋がっていた。

### 2. 学生交流について

タイ、プラバ大学の看護学部は、英語コースの学生14名前後の参加、フィリピン、アワレディオブファティマ大学の看護学生との交流では325名前後の学生が参加した。ブータンの留学生とは、佐久大学で対面交流が行われた。表3の分類「視野の広がり」に示されている通り、ブータンでは教育と医療費が無料であり人々の幸福度が高いこと、タイでは、看護学部の寮がコロナ軽症者の療養所として

表3 ブラバ大学とのオンライン授業とブータン、タイ、フィリピンとの学生交流

| 分類              | 記述内容  |
|-----------------|---|
| 視野の広がり          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ブータンでは、すべての国民が無料で教育と医療が受けられることが、人々が幸せと感じるポイントだと考える<br/>(以下、タイについて)</li> <li>・タイの大学の寮がコロナ軽傷者の療養所として利用されていた</li> <li>・コロナ禍で、皆オンライン授業で世界共通の苦しさがある</li> <li>・看護部のミッションが簡潔でわかりやすい</li> <li>・タイでは、産業看護科目がある</li> <li>・ブラバ大学では、英語コース・タイ語コースがあり、留学生も多く受け入れられていた</li> <li>・タイでは、必要単位数を取得し、試験に合格すると看護師・助産師が取得できる</li> <li>・タイでは年に3回の国家試験があり、就職時期もずれているのが気になった</li> <li>・教員は1年に10日間臨床へ行き、現場の状況を学ぶ、常に教員の質が高い</li> <li>・十分な知識、技術を身に付けてから実習に行く。事前学習がしっかりされている</li> <li>・看護師免許が5年毎の更新制で一定の研修を受け、看護の質を補償している</li> <li>・高齢者福祉施設では、入所者の労働に報酬が支払われ生きがいに繋がる</li> <li>・タイの高齢化が急速にすすむ中での医療体制の強化が必要</li> <li>・第一次医療(必須薬品の処方・縫合など)まで担う保健センターの役割と看護師の役割</li> <li>・看護師に高度な知識や技術、判断が求められる</li> <li>・看護師が足りず、看護師と患者の割合が1:466というのは驚いた</li> <li>・陣痛の怖さから、帝王切開による出産率が50%と上がってきている</li> <li>・正常分娩であれば24時間後には退院する驚き、母親の不安を思う</li> <li>・移民について考えたことが無かった</li> <li>・移民の課題、言葉の壁/知識不足/慢性疾患/長期入院、多くの課題</li> <li>・ヘルスボランティアは無償で責任が重く、課題の解決は難しい</li> <li>・移民に対して政策や保険に関して環境を整えてもいいのではないか</li> <li>・人口に対する移民の割合、陸続きの国と島国では違いが大きい</li> <li>・移民の経済的困窮、健康状態の悪化の負の連鎖</li> <li>・経済格差と健康格差の結びつき、知識があれば生活習慣が変わる。</li> </ul> |
| 異なった文化への理解      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ブータンについて、スタバや信号機がないことは気づかなかったが、発表を聞き驚いた</li> <li>・日本の浴衣と、ブータンのキラを交換して本当に嬉しかった</li> <li>・高校2年生であったが、しっかりした発表で国民性を直接感じた<br/>(以下、タイについて)</li> <li>・両親の介護は子供が見るものという考え方があり、介護は自宅で家族が行う</li> <li>・介護は有給休暇で行ない、負担が大きいと感じた</li> <li>・生きているうちに徳を積むというボランティア精神がある</li> <li>・タイは周囲からの移民が多い。隣国からの患者が多い</li> <li>・実習服はナースキャップとワンピースで決まっておりこの伝統を守っている</li> <li>・実習中、眠れているかとタイの学生に尋ねると、行く施設や担当教員によって変わると回答があり、親近感が湧いた</li> </ul>  |
| 看護職としてのキャリアの広がり | <ul style="list-style-type: none"> <li>・移民の文化的背景を理解し、生活習慣に対する行動変容させるのは難しい</li> <li>・日本にいる外国人にとって、医療の場での言葉の壁が大きいと思う</li> <li>・英語を話せるようになって、外国人が安心して医療を受けられるよう手助けしたい</li> <li>・日本にも外国人患者がいると知ると、その人への対応も考える機会になった</li> <li>・他の国の医療を学びたい、いつか海外(発展途上国)で活躍できる看護師になりたい</li> </ul>   |
| 語学への関心          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・母国語がある中で、英語が堪能で英語は世界共通語であると実感した</li> <li>・英語が話せるようになって、自分の言葉で思いや知識を伝えたい</li> <li>・これからの夢のために語学について勉学に励みたい</li> </ul>  |
| 積極性の増加          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の知らない事が多いので、興味を持って追求したいと思った</li> <li>・母国の伝統や文化を知り人に伝える力は国際交流には大切になってくると感じた</li> <li>・日本と違った文化がとても興味深かった。実際に行きたいと思った</li> <li>・もっと積極的に話せるようになりたい。ブータン、タイ、フィリピンの学生のプレゼンテーションが堂々としていた</li> <li>・短期間で3カ国の文化に触れ、更に違う文化にも触れていきたい</li> <li>・世界での出来事など、普段から世界のニュースを見て視野を広げていきたい</li> <li>・日本以外の国のことを知ることで、日本についてもっと知る必要があると思った</li> </ul>   |

利用されたこと、日本、タイ、フィリピンの共通事情としてコロナ禍によりオンライン授業となり不便な思いを共有していた。

「異なった文化への理解」では、ブータンの高校生との対面交流で、民族衣装に触れ文化の違いを肌で感じた喜び、更に、高校生でありながら気候変動などの問題意識を持ち自国の自然環境の変化について発表したことを評価していた。

タイとの学生交流では、タイの学生の実習服はナースキャップとワンピースで伝統的に決まっていると聞き、タイの伝統文化に対する強い意識を受け止めていた。しかし、文化を超えた共通点として、佐久大学の履修生が「実習中は眠れますか」とタイの学生に尋ねると、「行く施設や担当教員によって違う」との返答に、実習に対して国が違っても共通の大変さを感じて、とても親近感が湧いたと記述していた。

特に学生交流について促進されたのは、表3「語学への関心」「積極性の増加」であった。履修生は、ブータン、タイ、フィリピンの学生たちとプレゼンテーションを通して情報交換を行う中で、「ブータン、タイ、フィリビ

ンの学生のプレゼンテーションが堂々としていた、それぞれ母国語がある中で、英語が堪能で英語は世界共通であると実感した」と述べ、「英語が話せるようになって、自分の言葉で思いや知識を伝えたい、もっと積極的に話せるようになりたい」とコミュニケーション能力の向上に意欲的な表現が見られた。

### 3. 当事者参加型授業について

#### 1) 当事者参加型授業から学んだこと

タイ人である患者さんの語りを通して学んだこと(表4)について知識、技術の側面では、「看護師が良かれと思って行ったことが、患者にとって苦痛であると知った」と患者の思いを知ることより、これまでの実習で患者さんのところに話に行っただけで患者にとってはどうであっただろうかと自己の行動を振り返る場となり、相手の気持ちを考える大切さを実感していた。患者が好きなことは畑仕事であり、病院のベランダでプランターを利用した野菜作りが患者へ生きる希望を与えたことは、入院中その人らしさを尊重するケアが精神的な支えに繋がることを理解していた。

感情、価値観の側面では、患者が、疾患の

表4 当事者参加型授業から学んだこと

| 分類     | 領域              | 記述内容   |
|--------|-----------------|--|
| 知識の側面  | 認知領域            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師が良かれと思って行ったことが、患者にとって苦痛であると知る</li> <li>・しっかり相手の気持ちを考えなければいけないと実感する</li> </ul>   |
| 技術の側面  | 精神運動領域          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入院中に病院のベランダでプランターを使い、好きな畑が出来たことは、医療者がその人らしさを尊重したケアである</li> <li>・医療者が患者の希望を共有することは精神的苦痛を和らげるケア</li> </ul>   |
| 感情の側面  | 情意領域            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入院から自宅療養の話を通して表情や感情を生で感じながら聞いた</li> <li>・疾患による後遺症</li> <li>・いきなり体が自分の思い通りに動かなくなる辛さ</li> <li>・4年経っても病気や障害を受け入れられない辛さ</li> <li>・生きている価値を感じられず自殺を考えてしまう日々</li> <li>・耐え難い現実の連続だったにもかかわらず、(治療、介護サービス等により)「日本人に感謝します」と言われた時、言葉に迷った</li> <li>・支えてくれる夫に、半身麻痺であっても「片手でもお父さんの世話をする」という言葉が印象的</li> <li>・家族、特に夫のサポートは患者にとってとても心強い</li> </ul> |
| 価値観の側面 | 情意領域<br>(異文化理解) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉の壁</li> <li>・入院から自宅(異国である日本で生活)で療養している</li> </ul>  |

表5 今後の自己の課題

| 分類           | 記述内容  |
|--------------|---|
| 看護の学習者としての課題 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師が良かれと思って行ったことが、患者にとって苦痛であると知る</li> <li>・しっかり相手の気持ちを考えなければいけないと実感する</li> <li>・言葉の壁</li> <li>・入院中に病院のベランダでプランターを利用して好きな畑が出来たことは、医療者がその人らしさを尊重したケア</li> <li>・医療者が患者の希望を共有することは精神的苦痛を和らげるケア</li> <li>・今日のお話から得た学びを、看護師になってからも活かしていきたい</li> <li>・当事者の経験、思いを忘れずにこれからの勉強・仕事に活かしていきたい</li> </ul> |
| 人間としての課題     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入院から自宅療養の話で、表情や感情を生で感じながら聞いた</li> <li>・耐え難い現実の連続だったにもかかわらず、「日本人に感謝します」とおっしゃった時、言葉に迷った</li> <li>・支えてくれる夫に、半身麻痺であっても「片手でもお父さんの世話をする」という言葉が印象的</li> </ul>  |
| 社会と関連した課題    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人の良いところ、悪いところを理解し、看護師になっても忘れず活かしていきたい</li> <li>・日本にいる外国人患者に、英語が話せるようになって精神的苦痛を和らげる看護師になりたい</li> <li>・外国人患者の宗教や文化を理解していくことが看護する前提において重要である</li> </ul>  |

発症から後遺症による自身の体の障害を受け入れることができない心の葛藤と耐え難い生活上の困難の連続を家族や友人に支えられながら、今まで過ごしてきた時間の重みを印象深く聞いたことが記述されていた。更に、異国の地で生活し病に倒れても、病院の治療、介護保険サービスを受けたことなどから「日本人に感謝します」との言葉に、履修生は困惑していた。4年経っても障害を受け入れられない心情を語っていた。また、いまだに言葉の壁があることを履修生は認めたくなくて「言葉が通じなくても夫がいれば大丈夫」と支えてくれる夫の存在の大きさについて述べていた。

## 2) 今後の自己の課題

表5は、履修後の自己の気づきである。看護の学習者としての課題は、外国人患者には言葉の壁があること、その人らしさを尊重したケアが必要であることなどを痛切に感じており、この当事者からの学びが大きかったことを表していた。人間として課題、社会と関連した課題では、実際に表情や感情を直接感じながら聞いた。患者の言葉に戸惑った。片手でも夫の介護をするという言葉が印象的で

あったなど当事者から、学生自身の心が揺さぶられていた。そして、今回の学びを忘れずに看護師になってからも活かしていきたいという強い思いが表現されていた。

## IV. 考察

前述のプログラムから「オンライン授業」「当事者参加型授業」「学生交流」の学習効果について以下に考察する。

### 1. 事前学習・オンライン授業について

履修学生は日本とタイの歴史について学び、タイの古都であるアユタヤ地方には、「日本人村跡、資料館」が存在することを知り、看護のみならず幅広い知識を得ることとなった。タイのかつての王妃が看護職であったことを含め、看護職の社会的認識は高く伝統・文化が看護の内容にも影響していることを学んでいた。

タイでは、高齢の両親の介護は子供が見るものという考え方があると聞き、履修生は日本では介護保険を利用することにより子供の介護負担を軽減する選択肢がある現状をタイ

と比較していた。日本においても2000年に介護保険が施行される前後は、藤崎(2013)が述べているように家族主義的規範が強く、家族の介護負担が大きかった時代があった。伝統的医療は、タイの病院や保険センターの1つの部門として行われている状況の中で利用者が日本より多いと思われた。陸続きであるラオス、ミャンマー、カンボジア等から移民が多いタイの保健医療サービスについて講義を聞き、言葉の壁と健康の課題に気付くこととなった。上記の高齢者介護、伝統医療、移民への保健サービスのテーマについては、講義後の振り返りに日本の状況を顧みる必要性が示唆された。現地での施設見学などは、実際の場に自分を置くことで体感することができるが、オンラインでは難しく理論的な理解、言葉による情緒的な理解に留まることは否めない。

## 2. 当事者参加型授業について

外国人当事者としてタイ人の患者による当事者参加型授業を実施した。(柴田, 2010)が報告しているように「学んだこと」では、感情の側面の記述から情意領域の学びが伺える。更に医療職としての態度や姿勢、心理的ケアの必要性など技術の側面の学んでいることがわかる。当事者の個性・特性を十分に理解した上で、看護実践能力を養う一つの方策となることが示されている(古場, 2017)。「今後の自己の課題」では、当事者参加型授業を通して学生が自己を振り返り、自分の想像だけでは不足していることに気づき、わかったつもりになっていた自分に気付くなど、自己の課題を明らかにする貴重な機会(森川ら, 2004)となっていることが伺える。「看護」の学習者としての課題だけでなく、「人間」として、「社会」と関連した課題をも複合して認識することができ、学生の主体的・創造性を育てることに役立つ(森川ら, 2004)とされている。アンケートからも外国人患者との接点が少な

い学生にとって、授業の中で語られる当事者の体験を自らが感じ考え、自分のものとしていく過程となっていた。「当事者は、病的体験に苦しみ、自尊心が極めて低下し、人との円滑な関係を築くことも、日常生活を意欲的に送ることも阻まれている。当事者は苦しい心の中を誰かに分かってもらいたい気持ちを持っており、そのことを、真剣に語り、ともに考えてくれる人を求めている」まさに「有意味受容学習」(学習内容を認識構造の中に有意義に意味づける学習)が実現されるといえる(中谷ら, 2008)。表2アンケートでQ2の「最も関心を持った授業」に回答されており、印象強く認識されていることが伺えた。国際化が進む中で、学生時代に外国人患者と向き合っておくことによる学びは、看護師としての専門性、人間性の形成に役立つと思われた。

## 3. 学生交流について

今回のプログラムでは、タイ、フィリピンの看護学生とブータンの高校生との学生交流を行った。海外研修に於いて、学生同士の会話、食事や買い物などの状況では、ジェスチャー、態度などの非言語的コミュニケーションが英語力をカバーできる利点があり、対面コミュニケーションの効果は大きい(塩入, 東田, 2020)と報告されており、オンラインの交流では、コミュニケーションの限界は否定できない。しかし、今回の交流を通じて、同じアジアの国であっても、フィリピンの学生の発表には、テンポの良さや明るさを感じ、司会者のコミュニケーション力が素晴らしく、自分も見習わなければと思ったと日々の記録に記載していたことは、今後の行動変容に繋がると思われた。一方で日本人によく似た穏やかな雰囲気を持つタイの学生たちに国民性を感じていた。海外演習ではその国の学生としか交流できないが、オンラインという方法で数か国の学生と交流できる利点が認められた。「積極性の増加」では、積極的に他国の学

生たちとコミュニケーションを取りたいという意欲が感じられ、本演習を経験して異文化にもっと触れたい、実際に行きたいなど海外への興味が表されていたことから、将来への成長を伺うことができた。前述の経験を通して、履修生は自分が日本について理解し知識を得ておくことが交際交流には必要であり、日本について知らないことが多いと述べ、日頃から世界に目を向けていこうとする思考の変容が感じられた。

ブータンの高校生との直接交流について、オンラインでは難しい対面による多様な文化理解に繋がりオンライン授業との組み合わせによる有用性が示された。

#### 4. 限界について

2021年度の国際看護演習の履修者は2名であり、学生の記述、感想は限定的である。

## V. まとめ

今回の国際看護論では履修学生が2名であったが、異文化や外国人当事者の理解、学習意欲の向上、看護師の役割について認識ができ、キャリアアップを考える機会となっていたと考えられる。奥川(2021)は学生が国際看護学を学ぶということは、看護師に必要な幅広い知識を養い、それを実践できる技術を磨き、それらを場面によって使いこなせる柔軟な考え方ができる人へと成長に繋がっていると述べている。

オンラインでの限界もあるが、個人で負担する費用がないことから、希望するすべての学生が履修可能であり「豊かな人間性と幅広い教養を兼ね備えた人材を育成する」ことに繋がっていくと感じた。限られた時間の中で、3か国の学生と交流でき、文化に触れその違いやそれぞれの国民性を感じられたことは、オンラインならではのメリットであった。今後も、オンライン授業実施の可能性を考えて

内容を充実させていく必要がある。

## 謝辞

国際看護論の演習をオンラインで実施するに当たり、タイ、ブラパ大学Dr.Pornchai看護学部長、Dr.Jinjutha副看護部長、フィリピン、アワレディオブファティマ大学Dr.Maria Luisa看護部長をはじめ多くの講師、関係者の皆様、また、学生交流に参加いただいた他国の多くの学生の皆様のおかげで、佐久大学の学生は沢山の知識と刺激を得る機会となったことに厚く御礼申し上げます。

なお、本稿において開示すべき利益相反(COI)はない。

## 引用文献

- アユタヤ日本人村 2021/5/10, <https://www.youtube.com/watch?v=tWeMUefXePg>
- 藤崎宏子(2013). ケア政策が前提とする家族モデル—1990年代以降の高齢者介護—. 社会学評論, 64(4), 604-620.
- 蛭田由美, 久保宣子, 山野内靖子(2017). 看護基礎看護における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究—わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態—. 八戸学院大学紀要, 54, 39-54.
- 厚生労働省(2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 19-22.
- 古場真理, 澤田孝子, 大草知子(2017). 国際看護教育における当事者参加授業の学習効果. 日本医学看護学教育学会誌, 26(2), 46-51.
- 森川三郎, 中谷千尋, 伏見正江, 仲沢富枝, 野澤由美, 山下貴美子……藤波久恵(2004). 「当事者参加授業」の教育成果と概念モデルの検討. 山梨県立看護大学短期大学紀要, 10(1), 17-30.
- 中谷千尋, 森川三郎, 上田康子, 渥美一恵, 杉山由香里(2008). 看護基礎教育における当事

- 者参加授業の教育成果と課題. 目白大学健康科学研究, 1, 139-147.
- 奥川ゆかり(2021). 我が国の看護学部生への国際看護学の教育内容とその成果—文献レビュー—. 日本国際看護学会誌, 4(2), 1-11.
- 佐久のご紹介 2021/6/15, <https://www.youtube.com/watch?v=UwdKpavx2ug>
- 柴田貴美子(2010). 病や障害を抱えた当事者が語る「当事者参加型授業」の現状と教育効果に関する文献レビュー. 文京学院大学保健医療技術学部紀要, 3, 23-31.
- 塩入とも子, 東田吉子(2020). 佐久大学・国際看護論におけるタイ国での演習と学び. 佐久大学看護研究雑誌, 12(2), 157-165.
- 東田吉子, 中田覚子, 竹尾恵子(2015). タイ国, ブラパ大学における国際看護論の実施と学習の効果. 佐久大学看護研究雑誌, 7(1), 65-74.